

## 命を救った税金

福岡市立城南中学校 3年 石川 美月

一月一日。石川県の能登半島で震度七の巨大地震が発生した。能登半島地震だ。

この地震で多くの人々が亡くなり、およそ八万一二四二棟の住宅が被害にあった。しかし、この地震から半年経った現在、道路や水道などの復旧が進み、お店も徐々に営業を再開し始め、生活しやすい街へと復興を遂げている。私は、大規模な地震で大きな被害を受けた街がこんなにも早く復興するために、どのような人が動き、費用はどのように用意されたのか疑問に思った。

私は小学生の頃、石川県に住んでいた。そこで当時の友達に地震後の状況について聞いてみたところ

「道路が崩れて家に帰れない状態だった。でも自衛隊の方に助けてもらった。」と言っていた。私はそんな状態だったことに衝撃を受けたと同時に、少し安心した。自衛隊の方はどんなに危険な場所でも、私達の命を優先して活動してくれる。どんな場合でも助けに来てくれる「自衛隊」は私達にとって、すごく大切な存在だ。その自衛隊の仕事である、国の防衛や災害派遣などの活動には私達が払う税金が使われている。税金があって自衛隊の活動ができていることに気づき、今まであまり意識したことがなかったが、税金の大切さを強く感じた。また、災害時に怪我をしたときの医療費や仮設住宅の建設にも税金が使われており、地方税や国の補助金、寄付金、地方債といった様々な税金が復興のために県に寄せられている。その中に「義援金」というものがある。これは被害の大きかった市と町の全ての住民に一人あたりの配分を決め、申請できるというものだ。能登半島地震を受けて県に寄せられた義援金は、なんと五三〇億円を超えていた。これらのお金は、募金活動などで集められている。街の復興のためには、多くの人々の協力がないと遂げていくことはできないと改めて実感した。私達の払っている税金や募金活動など一人一人の支援が積み重なって社会に貢献している。

私は、税金に対してあまり深く考えたことはなかったが、今となっては命を救うためにも税金は重要であり、とても大きなものである。

—もしも、あのとき自衛隊が派遣されていなかったら—  
友達はもっと危険な状態にあっていたかもしれない。税金によって救われたと私は思う。様々な支援・協力があって今、能登半島地震からの復興を徐々に遂げている。

世の中は税金によって成り立っており、一人一人の税金が誰かの助けとなって社会は動いている。今はまだ私達は、税金によって守られている側だが、次は私達の番。大人になり、社会に貢献するためにも税金を納めて国の未来を担っていかなければならない。税金への感謝を忘れず暮らしていく。幸せな未来になるように。